

『捨てられ聖女は働かないっ!～追放されたので念願のスローライフはじめます～』

作:イチカ

提供:エブリスタ

<あらすじ>

聖女としてこき使われた挙句、偽物として婚約破棄されたセリシアは、喜んで聖女の立場を放棄して追放先の最果ての地にやってくる。瘴気に苦しんでいた人々を助けたセリシアは、「聖女じゃないから対価を要求する」と言い張りつつも善良さが抜けきれず、結局皆に感謝されることに。

拾った美しい魔族の少年、アルに助けられながらカフェを営みつつ、かつての勇者に遭遇したり、狼藉ものを倒したりと波乱の日常を送るが、やがて元の美しい姿に戻ったアルから明確なアプローチを受けるようになって……。

<キャラクター設定>

■セリシア、通称シア

主人公。ルルベル王国の聖女だったが、王子に婚約破棄され、最果ての地に追放される。

年齢:18 歳

身長:小柄

髪:明るいピンク色の髪

瞳:碧眼

■アル

魔族の少年(先代魔王)。力を失って倒れていたところをシアに助けられ、一緒に暮らすようになる。

年齢:20 代前半ぐらい。少年時は 10 歳ぐらい。

身長:魔族の中でも高身長なほう

髪:黒。ツノが生えている

瞳:紅茶色の瞳

顔立ち:人目を引くほど容姿端麗な美丈夫

■備考:シアの住宅のイメージについて

- ・疫病の治療報酬でもらった空き家を補修して暮らしている。
- ・町の住宅地から外れた山よりの場所にあるので、周りには他に家なし。代わりに庭が広い。
- ・木造、平屋建て、2LDK、お風呂・トイレありの古めな小山風の佇まい。中は洋室板張り。
- ・シアの部屋は主寝室のため、少し広め。ベッドやクローゼットや薬品棚や作業台などがあ

り、全体的に物が多め。

・アルの部屋は少し狭めだが、シアとは対照的に物が少なく、家具もベッドとクローゼットのみ。

※上記はあくまで参考です。

作画の際には適宜改変いただいて問題ございません。

■課題原稿■

※青字の部分を原稿としてご提出ください。

あのまま眠り続けたのか、翌朝になってもアルが部屋から出てこない。

回復魔法で死ぬ事はないはずなんだけど、流石に心配になってアルの部屋のドアを叩く。ノックをしても返事がない。

「アル? 開けるよ」

「シア、来ちゃダメっ」

私が声をかけながらドアを開けたのと中から覚えのない声が入室を制止したのはほぼ同時だった。

「……………誰!？」

私は目を疑ってなんども瞬きを繰り返す。

アルのベッドのはずなのに、上半身裸でベッドから上体を起こした、黒髪でツノの生えた紅茶色の瞳の青年がそこにいた。

「まさか、魔ノ国最高峰の呪いが一日で解けるとか、シアの聖女の力強過ぎでしょ」

私の18年の人生でお目にかかった男性の中で圧倒的に一番イケメンなその人は、女の子なら一瞬で恋に堕ちそうなくらい素敵で声を聞いた瞬間にそう言った。

私はその青年をマジマジと見る。冒険者や怪我人の治療で男性の裸なんて見慣れているけど、うんいい身体してますね。

って、そうじゃない!と、だいぶ動揺している私は自分で自分にツッコミを入れる。

私の事をシアと呼ぶ魔族など、アル以外にはいない。それに私に向けられた眩しい笑顔とキラキラオーラは変わらず、アルの面影もある。

「……………アル、なの」

「そう、だよ」

歳の頃は20代前半くらいだろうか? 可愛い少年が、たった一日で女子が悩殺されそうなイケメンに大変身。

物語なら美味しい場面なのかもしれない。だけど、これは現実。嘘でしょとつぶやいた私は両膝をついて崩れ、床をぐーで叩く。

「アルがっ! 私の可愛いアルがっ!! 来月オープンさせるカフェで看板息子にして奥様方取り込む計画でアル用にカッコ可愛い制服せっかく発注したのに、実装前に大人にっ ー!!」この美丈夫がアルだと認識しての第一声がコレってどうよと自分でも思わなくはないが、真っ先に浮かんだことが口をついて出てしまった。

だって、アルにナイショでせっかくこっそりひっそり準備してたのに、とショックが大きくてしばらく立ち直れないかもしれない。

「……………シア、それ俺聞いてない。ていうか、働かせる気満々じゃん」私の願望と煩惱ダダ漏れの計画に苦笑したアルは、

「ごめんけど、とりあえず服欲しい。話はそれからで」

とても冷静にそう言った。

13.その聖女、困惑する。

着替えが終わり、ようやく部屋から出てこられたアルは、いつもと変わらない眩しい笑顔でありがとうと礼を言った。

「……って、シア何してるの?」

「神々しくて、目がっーって図?」

「魔族に神々しいなんて表現、初めて聞いたよ」

アルはそう言って笑うけど、白シャツと黒のスラックスってだけなのに、カッコよく見えるのだからイケメンは得だ。「後でちゃんと採寸しましょ。簡単な服ならすぐ作ってあげる」

とりあえずで用意した男性用の服は、今のアルには小さかったようで、袖も裾も寸足らず。急いで買える中で一番大きなサイズを用意したのだけど、アルは魔族の中でも背が高い方なんじゃないかしら?

昨日まで私の事を見上げていた視線が、私の事を見下ろしている。同じ紅茶色の瞳だというのに、なんだかとても不思議な気分。

そして、一周まわって冷静になってきた私はじっと彼を見る。

アルがいつか大人になったらこうなるだろうなと思っていた通りの姿で、でも笑った顔は可愛いアルの面影を残したままで、聞き慣れない低い声で私の事をシアと呼ぶ。

目の前にいるのは、間違いなく私が半年共に暮らしたアルだ。

「ねえ、アル、色々聞きたいことも言いたい事もあるけれど、とても大事なので1つ確認させてくれる? あなた元々本来はその姿だったのかしら? それとも魔族とは一晩で大人になるものなのかしら?」

答えを聞くのがとても怖いんだけど、これが一番大事! だって、私この半年アルに色々見ら

れているし、色々してるし。

子どもだと思っていたからこそ手を繋いだり、抱きしめたり、昨日は額にキスまでしてるんだけど、このイケメンにやってたら私、普通にセクハラで訴えられる案件っ!!

っていうよりも、本当に居た堪れない。

「.....シア、とりあえずごはんにしよ? 俺作るから」

「いやいやいや、先答えてよ!」

「ん?でも、シアなんか殺気だってるし。多分どう答えても、俺の事すぐに家から叩き出しそうだし」

殺気だってるっていうか、もうこの半年が走馬灯のように駆け巡って涙目だよ。落ち着けて言う方が無理じゃない!? と口を開こうとした私に、

「お腹空いてると、余計にイラついちゃうし、俺もお腹ぺこぺこなんだ。だから、ね?」

とキラキラオーラ全開で笑ってそう言う。ね? じゃないっ! 騙されるかぁ!! と叫びたかったのだが、

「カフェメニュー俺も考えてみたんだ。シアに食べて欲しいんだけどダメかな?」

少ししょげた様子で伏し目がちにそう畳み掛けられて折れた。

大人になってまで、小さなアルと同じ動作をしないで欲しい。うっかり垂れた犬耳の幻が見えそうで、破壊力がヤバイ。

了承を告げた私は、メンタル立て直しのため一旦離脱する事にした。

小さなダイニングテーブルに向かい合って座る。アルに出されたちょっと遅めの朝食はガレットだった。

「地産地消したいっていったし、ターゲット層は女性向けってことなら、こういうのどうかなって。うちで採れた卵と野菜を使って、ヤギのミルクとパンつけて、ヤギの乳で作ったチーズとバター添えて。似た内容でパスタメニューもいけると思うから、品数絞って回した方がロスも少なくっていいかなって」

「.....めっちゃオシャレ。そしてすごく美味しい。アル天才っ」

カフェ営業は思いつきだったのに、しっかり計画立ててくれるアルを褒めつつ、ガレットに舌鼓を打つ。

「あとは簡単なスイーツ日替わりで用意して、ジュースかコーヒーか紅茶選択してもらってもいいかな。食糧事情がかなり改善されて、貿易で色んな品物入ってくるようになったし」

「うわぁ、何それ! トキメキしかないっ」

アルの作るごはんスイーツ。絶対美味しいに決まっている。むしろ私が通いたいととてもリアルに想像できたところで我に返り、抗議の声をあげようと口を開く。

が、声を発するより早く口の中に何かが放り込まれ、私は目を白黒させながら夢中で咀嚼する。

「.....美味しい」 「よかった。とりあえずパンケーキも試作したんだあ。ヨーグルト入りで

ふわふわのもちもちを目指してみました。もちろん、生クリームも自家産だよ」
フォークを持ったまま、にこにここと微笑むアルに勝てる気がしない。なぜなら私はこの半年で、アルにガッツリ胃袋を掴まれているからだ。

「男の人は飲み屋があって息抜きできるけど、女の子も気軽に息抜きできる場所があればいいなあーって、思ってカフェ作りたかったんでしょ？」

「.....勝手にヒトの思考読まないでくれる？ 魔族はヒトの心でも読めるの？」

「まさか。でも、シアが考えていることは分かるよ。シアはいつも誰かのために一緒懸命頑張るから」

「.....買い被りすぎだわ」

誰かのために、ずっと一生懸命尽くすなんて母みたいな生き方、私にはできない。現に、追放されたのをいい事にずっと現実から目を逸らしている。

アルは目を伏せて、フォークを置いた私の頭を優しく撫でる。触れた手が温かくて、そしてとても大きい事に驚く。

「カフェでも何でも、シアが好きな事をしたらいい。俺なら絶対どんな事でも黒字にできるよ。ほら、俺は有能な上に顔がいいから」

アルは少し茶化すような口調で笑ってそう言った。「そんなわけで、経営者《オーナー》さん、俺のことを継続雇用しませんか？」

楽しそうな口調とは裏腹に、アルの紅茶色の瞳は懇願するような色を帯びていて、私はすぐさま突っぱねることができなかった。